

中国帰国者の日本におけるイメージに関する実証的研究：特に「オリエンタリズム」批判の視点から

姜，麦瑞
九州大学大学院比較社会文化研究科

<https://doi.org/10.15017/2320115>

出版情報：九州人類学会報. 24, pp.4-17, 1996-12-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



中国帰国者の日本におけるイメージに関する実証的研究 — 特に「オリエンタリズム」批判の視点から —

九州大学大学院比較社会文化研究科

姜 麦 瑞

1. はじめに

私は1994年1月に来日したが、当初の不安は、日本と中国の文化の壁を越えられるかどうかということであった。私は日本という異文化の世界の中で常に違和感を抱きつつ生きていくことになるのではないかと心配したものである。しかし、実際日本で暮らしてみると、その壁をそれ程高いとは思わなかった。もちろん日本社会も多様であり、どの層の人々と接するのにもよるし、何を以て文化とするのかという問題も残るのだが、生活習慣やルールという意味での文化について言えば、少なくとも私が主に接する日本人との間で、何の違和感も抱かなかった。そういう文化を知識として学び、模倣していくことはそれほど苦にはならなかったのである。

ところが私は、全く別の意味での違和感を持つことになった。それは日本人の中国についてのイメージに対してである。日本で流通している中国についてのイメージと、私の中国についての理解がかなりずれていることに、強い違和感を覚えたのである。特にマス・メディアで流されるニュースの内容や、その語り口に対してそう言える。例えば、次の中国帰国者についての新聞記事からの引用を試みよう。

「祖国で死にたい」と中国残留婦人ら十二人が、集団で自費帰国してから十カ月近くがたつ。全国各地に散る彼女たちを訪ねた。どの顔も、いくぶんふっくらし、刻まれた 皺（しわ）の深さもやわらかくなっていた。「幸せです」「ヨカッタヨ」と祖国に帰った喜びを改めて語ってくれた。自宅に風呂があること、花柄のブラウスが着られること、清潔な生活環境……。日本人にとってはごくふつうに見える、ささやかな「幸せ」を口にした。（朝日新聞 1994 6/24）

これは、朝日新聞に掲載された「ささやかな『幸せ』と独りぼっちの寂しさと」と題する記事からの引用である。この記事の中の、中国残留婦人が「日本人にとってはごく普通に見えるささやかな幸せを口にした」という部分が私に強い違和感を抱かせることになった。この記事によれば、その「ささやかな幸せ」とは「自宅に風呂がある」こと、「花柄のブラウスが着られる」こと、「清潔な生活環境」などだそうだ。このような「日本人にとってはごく普通のこと」は、中国では「普通のこと」ではない、手に入れられないものだということである。つまり、残留婦人は中国にいる時より「幸せ」になったというわけだ。その彼女らはまた、「世話をされる側の悲しみ」も述べている。ということは、ホストである日本人の社会に「世話をされて」、「中国にいるときより幸せ」になったことを意味しよう。このような語り口には、日本人＞残留婦人＞中国人という図式が暗示されているとしか私には思えない。要するに、この記事は残留婦人を媒介として日本と中国を過剰に差異化しているのである。⁽¹⁾

これ以後、中国に関連した記事やニュースを注意して見るように心がけた。すると、マス・メディ

アで日々生産され流通する中国に関する表象の中に、上の記事のバージョンがいくらかでも見受けられたのである。「中国は『改革開放』政策の導入以降、国民全体が極端な拝金主義に走り、おかげで貧富の差がどうしようもないほど拡大している、一方で治安が悪化している、というのも軍隊も警察も共産党幹部も皆金儲けに走り、腐敗がひどくなっているから、そして人権抑圧も相変わらず激しい」、といった主旨の新聞記事、テレビ番組は挙げていくと枚挙に暇がない。なぜこのように中国の悪いイメージを強調するのだろうか。もちろんそれは日本と中国の差異化が目的であろう。マス・メディアの語りには、資本主義と共産主義、民主主義と全体主義、豊かな社会と貧しい社会というような二項対立が明らかに存在している。そして、中国を日本と全く逆の社会、つまり他者として描くことにより、日本は自分のアイデンティティを優越感を持って確立することができる。

そして問題は、以上のような日本人の視点による中国についての報道に対して、中国人の側は全く反論する機会がないということだ。これこそ、サイードの言う「オリエンタリズム」ではないのか。彼は西欧の非西欧に対する一方的な意味付け、書き込みを「オリエンタリズム」と呼んで厳しく批判したが、それが、まさに日本の中国についての報道姿勢にも当てはまるのではないだろうか。そして、中国を日本と正反対のイメージで描き、両者をより一層差異化し、優越感を得ようとする「オリエンタリズム」的な言説は、中国という国家に対してだけではなく、日本の中の中国人、つまり在日中国人に対しても発されている。いや、むしろ本稿で論じる中国帰国者については、元々「日本人」として生まれ、中国で育ったため、日本と中国の歴史と現状を比較対照し、差異化するための格好の材料として利用されている感すらある。その結果の一つが先に引用した記事に現れている。

そこで私は、実際に中国帰国者の日本や中国での生活振りや、両国に対するイメージなどを聞いてみることを思い立った。フィールドワークによって、この「オリエンタリズム」がいかに不当なものか、つまり自分の違和感が単なる思い過ごしではなく、根拠のあるものなのかどうかを実証的に確かめてみようと思ったのである。従って、本稿では、中国帰国者に関する「オリエンタリズム」がいかに不当なものか、根拠のないものであるかを検討していくことを目的とする。帰国者がどのような経済的、政治的問題を抱え、苦しんでいるのかというジャーナリスティックな視点から彼等を見るのではない。もちろんそれを隠蔽するつもりはないが、まずはマス・メディアの中で彼等がどのように描かれているのか、そしてそのどこに問題があるのかについて、私自身の帰国者の調査に基づいて検討を加えるつもりである⁽²⁾。そして最終的には、この批判的視点によって初めて可視化された、中国帰国者の日本社会との主体的「交渉」の側面にも言及し、予備的な考察を加えるつもりである。

2. 「オリエンタリズム」とコロニアリズム

サイードがアメリカ社会に生きるパレスチナ人として、アメリカにおける中東に関するイメージに違和感を覚えたように、私も、日本で流通している中国についてのイメージと、私の中国についての理解がかなりずれていることに強い違和感を持ったのは、1章で述べたとおりである。サイードと同じようなジレンマに私も置かれていたわけで、彼の「オリエンタリズム」批判という方法論に、私が魅力を感じたのは当然であろう。もちろん、サイードの「オリエンタリズム」批判については、それが「オクシデンタリズム」という名の「オリエンタリズム」の逆バージョンにすぎないという反批判があることは知っている (Coronil 1996)。しかし、現に中国に対する「オリエンタリズム」は実施さ

れ続けているわけで、それ自体はやはり批判されねばならない。とすれば、問題はどちらを選択するかということであろう。たとえ現在のイメージへの批判が新たなイメージの押しつけになるとしても、以前のイメージよりは政治的性格が緩和される可能性があるとするれば、やはり、「オリエンタリズム」批判を経る必要はあるのである。

本章では、この「オリエンタリズム」を、以下の章で表象分析を行うための視点として、私の問題意識と照らし合わせて再定義することを試みる。サイードは「オリエンタリズム」を、例えば「参照と引用のシステム」による「イメージの表象・現前」と定義している（サイード 1993[1978]下:63）。つまり、本から本へ、言説から言説へとイメージが受け渡されることを通じて、そのイメージが現実性を獲得すると言うのである。サイードにとって、「オリエンタリズム」とは、このようにあくまで「文化的プロセス」なのだ。

そして、N. トーマスも、その著書“Colonialism’s Culture”の中で同様の議論を展開している。我々が普通、コロニアリズムという言葉から連想するのは、軍事的侵略や政治的支配・抑圧、経済的搾取などである。しかし、彼に言わせれば、コロニアリズムはいつも「文化的プロセスであり」、「コロニアリズムの発見と侵入はいつも記号・メタファー・語りを通して想像され、エネルギーを与えられてきた」もので、「最も純粋な利益と暴力さえも、意味の構造により媒介され、枠組の中に入れられた」という（Thomas 1994:2）。つまり、「人種」や「国家」や「文化」などの差異についての信念を作り上げる「文化的プロセス」こそが、コロニアリズムだということである。ここにおいて、「オリエンタリズム」とコロニアリズムは重なり合うことになる。「オリエンタリズム」とはコロニアリズムだったのだ。

そして、まさにこの「エネルギーを与え」たり「意味の構造により媒介する」のが、文化を語る人々であった。この意味では、例えば、良心と正義感で語る新聞記者も、文化相対論で語る人類学者も、その政治的な性格において、露骨な植民地支配者と何も変わらないことになる。しかし、マス・メディアや研究者、つまり知識人がコロニアリズムのために果たした役割の重要さにもかかわらず、それが直接的ではなかったという理由で罪に問われることはなかった。従って、彼らは反省する機会も持たなかったのである。その結果、現在のポストコロニアルな時代にあっても彼等の本質は変わっていないということをトーマスは指摘している。彼は、文化を語る人々は一貫してコロニアリズムつまり「オリエンタリズム」を実践しているのに、そのことに気付かず、また誰からも指摘されることなく、リベラルで進歩的という名の下、忌まわしい過去と「幸福な分離」を行っていると言うのである（Thomas 1994:17）。

従って、「オリエンタリズム」批判とは、現地における植民地支配者と被支配者の政治的な関係の反省を促すものというよりは、むしろ、それについて語る、例えば文化人類学者やマス・メディアの社会的影響力、つまり社会性あるいは政治性というものの反省を促すものなのだ。恐らくサイードの真意もそこにあったはずだ。先にも述べたとおり、私がこの小論で、帰国者が日本社会の中で抱えている様々な問題に触れるのではなく（それはマス・メディアが語ってくれている）、そのマス・メディアによる帰国者の「問題」についての語りの中に現れる「オリエンタリズム」的性格を「問題」にしたのは、以上のような考察を経ていたからである。

このように、本稿が単に帰国者を客観的に描くだけではなく、「私」もその中に含まれる「文化を

語る側」の政治性の反省を主題とする以上、それは必然的にマイノリティ一般についての民族誌の描き方の考察にまで踏み込むことになる。しかし、紙幅の関係もあり、それは別の機会にあらためて論じるつもりである。従って、本稿は、その考察のための予備的な試論でもあることをここで確認しておきたい。

3. マス・メディアに見られる中国帰国者のイメージ

本稿で取り上げる記事は、主として1994～1995年にかけての新聞紙上に現れた帰国者に関するものであるが、もちろん全く無作為に選んだわけではない。しかしだからと言って、自分の視点に合う都合のいい記事ばかりを集めたわけでもない。私は上記の期間、帰国者に関する、朝日、毎日、読売、西日本各新聞の記事はほとんど目を通し、そして、例えば朝日についても、西日本についても、ある一人の記者が帰国者関連の記事をずっと担当していることがわかった⁽³⁾。当然その内容は同じ視点から書かれることになり、一つの新聞には一つの傾向ができる。従って、ある新聞に掲載されるたくさんの記事のうちのどれを取り上げても結局は、その新聞の帰国者へのスタンスを反映したものになる。私はそれらの記事から、「オリエンタリズム」的記述が特に顕著なものを選び、分析することにした。ここではそれらすべてを取り上げるわけにはいかないので、代表的なものをいくつか紹介し、考察していく。そして、そこに受け継がれている共通の趣旨、サイードの言う「同系観念群」(サイード 1993[1978]上:103)を明らかにするつもりである。

まず、読売新聞の次の記事から見てみよう。なお全文を引用するのは紙幅の関係上避けることにする。

劉鳳英さん(54)は来日前には日本への永住帰国を決めていた。しかし、その決心が揺らいでいる。故国・日本に対する認識が甘いことに気付いたのは、先輩孤児の職場や自宅を訪ねた時だった。日本語習得への不安もこの訪日で一気に頭をもたげた。

劉さんは、貿易会社やホテルを経営する女性社長。月収九百元(日本円で一万八千円)は、中国ではかなりの高給取りだ。養父母に恵まれずに、食べ物も十分には与えられなかったことから、「自分で身を立てねば」と、必死に働き、今の成功を収めた。

既に帰国した孤児宅訪問では、つましい日本での暮らしを見た。「安定した中国での生活を捨てることができるのか。そのうえ日本語もできない」。訪日調査の行事をこなすにつれ、決心は揺れた。その一方で、中国にいつ政変が起きるかわからないという、もうひとつの不安もぬぐい切れない。

中国での家族は…(中略)…六人の娘がいる。その六人の娘は全員が、「日本に行きたい」と夢を膨らませている。二人の娘は職がなく、「働けば働くほど報われる日本に行きたい」と言う。…(以下省略)…(読売 1994.12/6)

この記事から、そこに帰国者についての多くのマイナスイメージがちりばめられていることを見抜くのはそれほど困難ではない。まず、「中国にいつ政変が起きるかわからない」という部分だが、これは政治的に不安定な中国というイメージを連想させる露骨な表現であろう。しかも、彼女自身の言

業については括弧がつけられているのに、ここだけにはそれがない。本当に彼女がこの言葉を語ったのかどうかも疑わしい。次に「働けば働くほど報われる日本」という表現が「働いても働いても報われない中国」、はっきり言えば「個人の能力を発揮する機会のない中国」を念頭に置いているのは明らかであろう。もちろんこれを語ったのは劉さん自身かもしれない。しかし、そこが記者の印象に残ったということは、記者にとって、そういうようなイメージが耳ざわりの良いものであったことがうかがわれる。日本に来ることを「夢」と表現していることから、記者が中国と日本をどれ程差異化しているかわかる。

そして、興味深いことは、その一方で「必死に働き、今の成功を収めた」という記述があることだ。記者はなぜ、上述したマイナスイメージに反するような語りをわざわざ挿入したのだろうか。これはその直前の部分にある、「養父母に恵まれず…」という語りに注目したい。「必死」であればあるほど、その動機である「養父母」の虐待が強調される。この「養父母」が中国人のメタファーであることは言うまでもないだろう。こうして、幼い子供を虐待する野蛮・冷酷な中国人というイメージが、読み手に印象づけられることになる。また、そもそも「成功」といっても、「月収九百元（日本円で一万八千円）」である。中国では「必死に働いて」、「貿易会社やホテルを経営する女性社長」になっても、たったそれだけの収入しか得られない、しかもそれが「中国ではかなりの高給取り」だということを強調している。つまりマイナスイメージを破壊する一方で、抜け目なく修復しているのである。というのも、日本人にとって物価は経済発展の指標になっていて、それが安いというのは日本人のアジア諸国に対する優越感の源泉の一つになっているからだ。しかし、私の経験から言って、「貿易会社やホテルの経営者」がその程度の収入であることはありえないし、またその程度の収入が「高給取り」の部類に入ることもありえない。収入か事業内容か、どちらかが誇張であろうが、いずれにせよそうすることにより、中国経済の後進振りが読み手に訴えられる。以上のように、この記事には、日本と中国の政治的安定度、経済体制やその成熟度の差異、それに伴う日本人と中国人の人間性の差異が二項対立的に表されているのである。

次に取り上げるのは朝日新聞からの記事である。

訪日中の中国残留日本人孤児たちは三日午後、東京都内のスーパーで「買い物」を体験した。「品数が豊富」「包装が美しい」と目を見張る一方で、東京の物価高にため息をついていた。（朝日1994.12/4）

買い物にわざわざ括弧をつけるのは一体どういう意味だろうか。これは、「買い物」が訪日調査の公式行事の一つであり、ただの買い物ではないという意味を込めたものであるに過ぎないのかもしれない。しかし、それならそう書くべきであろう。この表現のままでは、スーパーでの買い物は括弧付きで語られなければならないほど、帰国者（つまり中国人）にとって珍しい「体験」であるかのようには思われのではないだろうか。清潔なフロアーに豊富な品物が整然と並べられ、セルフサービスで品物を選び、レジスターでお金を計算するスーパーマーケットは、いわば西欧近代の象徴である。そして帰国者はそれに「目を見張る」のであるから、読み手は、中国人がまだ前近代の段階にあるというイメージを持つことになる。しかし実際には、「品数が豊富」なスーパーは、大都市では既に普及し

ているし、地方都市でも決して珍しいものではなくなっている。中国人にとって「スーパーでの買い物」は「体験した」と語られるほど大袈裟なことではないのである。

このように特に経済面で中国と日本を差異化し、日本人に一種の優越感をもたらすような語り口は、毎日新聞でも変わりはない。

…戦争を憎みながらも「過去」として受け止める流れが広がりつつある一。…一方、中国の暮らしは経済成長に伴って上向き、深刻な生活苦は少ない。終戦五十年目を迎えた今、それぞれの重い戦後の中に「時代」の変化が見える。…（中略）…

戦争によって育った国が二分され、日本で育った同世代の人々について「幸せに思う」「うらやましい」という思いがほとんど。その理由には「親と一緒に暮らせた」「物質的に恵まれている」などが挙げられている。…（中略）…

急激な経済成長が続く中国。今の生活について聞いたところ「困ることはない」「給料が上がって楽になった」などの答えが多く、経済成長で生活のレベルが上がっている様子がうかがえる。

しかし、「物価が高く、家は貧しい」と嘆く農村部の人もいた。（毎日新聞 1994.12/2）

「深刻な生活苦は少ない」という表現から、「少ないがまだまだある」、「つい最近までは少なくなかった」という意味を読み取ることは、読者にとってもそう難しいことではないだろう。「生活のレベルが上がっている」という表現から、「しかしまだまだ日本には及ばない」という意味が読み取れるのも同様である。最後の段落部分の一文をわざわざ独立させ、「貧しい」ということを読者に印象づけるような構成にしていることから、記者が、言外にそのような意味を込めていることが窺われる。総じて言えば、既に発展を成し遂げたものが、優越感に浸りながら高見から評論している印象を受ける。読者はこの記事を通じて、内容のみならず、そのような記者のスタンスをまず内面化するのではないだろうか。

さらに、孤児達に、「同世代の日本人に対し」、「幸せに思う」「うらやましい」と言わせることによって、日本と中国の差異を決定的に印象づけている。孤児達は日本人の子として生まれ別の国で育った人々であるため、住んだ国の善し悪しを比較する格好の存在である。その彼等に「日本人がうらやましい」と言わせることができれば、日本が中国に比べていかに素晴らしいかの証明になる。読者も日本と中国の差異を強化することであろう。その目的で、このようなアンケートを実施したのではないということすら疑わせる。そもそも、日本に招待されて来ている孤児達が、このアンケートに「日本人は不幸せです」などと答えることがあるだろうか。また、実際に36人の孤児の内、何人が「うらやましい」などと答えたのかも、明示していないのである。

ここまでで、ほぼ日本の三大新聞を一通り見終わったわけだが、いちいちあげていくときりがないぐらい、全く共通した二項対立的な語り口が見られる。中国に日本と正反対のイメージを押し付け、いわば日本の他者に仕立て上げ、それを通じて日本は自分のアイデンティティを形成する。日本人でありながら中国で育った中国残留邦人は、比較のための格好の材料なのだろう。そして、これは新聞記事に限らない。次にあげるのはルポルタージュからの引用である。

「ホテルのまわりには公安局員の目が光っているのに、どうやってまた」。三階の山城さんの部屋に飛び込んだ真鍋は、真っ先にそのことを聞いた。

「孤児のところには公安局の人がまわって足止めしているんです。私の家に何人もの孤児が、どうしようって相談に来ました」

「それにしても、中国はどうしてそこまで…」真鍋が言い掛けると五十嵐さんは、それを制するように声を低めて言った。

「四人組のころの、またあの暗い時代に…」真鍋の胸には、五十嵐さんが声をひそめて言ったその言葉がいつまでもひっかかっていた。文革大革命のころ孤児や、その孤児を育てた養父母がどれほど辛い目にあったかは、山本慈昭さんから何度も聞かされて知っていた。

こんな思いの人々を、三十六年間、この他国に残したまま私の生まれた国は繁栄してきた。この先もまたその思いを顧みることもなく、この国は繁栄し続けて行くのだろうか。(読売新聞社会部 1982:61)

このルポの目次には〈瀋陽の冬〉や〈祖国の春〉という章題がある。孤児達の中国での生活は「冬」で、日本帰国後は「春」という意味であろうか。そのような解釈をせざるおえないほど、このルポには「オリエンタリズム」的記述に溢れている。例えば、上の引用の内容は、読者に、中国においては一挙手一投足が監視され、基本的な人権も自由もないようなイメージを与えるだろう。この記者の意図が仮に「この国の繁栄」に反省を促すものだとしても、その手段として、中国に、「そこまでは、暗い時代の国」というイメージを押し付けることについては何の反省もない。このような視点から書いている以上、たとえ「帰国者の代弁者」のような顔をして彼等が抱える問題点を指摘しても、少なくとも私には何の説得力もない。ではもう一つルポから引用してみる。

これを中国からの帰還者にあてはめてみると、彼らは文革を体験した社会主義国から、高度成長をへた資本主義国へと、あまりにも対照的な環境の変化に身をさらすことになった。しかも、彼らの移住の背後には、半世紀におよぶ不幸な歴史が横たわっている。彼らの両親もまた、誤れる国策によって送りだされた移民であり、多くが屯墾病という心の病を経験している。それから戦争と敗戦、遺棄と忘却の長い時間をへて、再び彼ら自身、心ならずも移民の立場におかれている。その子供たちをふくめると、三代にわたる終わりなき旅をしいられてきたことになる。

社会文化状況の大きな落差、日常生活における習慣や価値観の埋めがたい相違、四十年間馴染んできた親戚との別離、友人の喪失。言語障壁による心理的疎外感・孤独感……こう考えてくると、帰国者たちの心の病への契機は数え切れぬほど彼らをとりまいている。(井出孫六 1986:272-273)

ここでは差異が、「あまりにも対照的な環境の変化」「落差」「埋めがたい相違」という言葉で表現されている。「社会文化状況」とは、どっちが上でどっちが下というように比べられるものだろうか。文化は「価値概念」ではない、というような「常識」が中国に関する限り簡単に破られてしまう。そして、その「落差」の大きさのために、そこに書いてあるように「心の病」に陥るというのだ。この「心の病」とは何だろうか。それは例えば次の引用に現れている。

「私は日本人だから、日本人がすることと同じことをしなくてはならないと思った。あまり踊りたくはなかったが、自分に言い聞かせた」と炳君は言う。

炳君は、「母の国」に帰れば、日本人である本当の自分になれると信じていた。しかし、中国で文化・習慣を身につけた炳君は、自分で「日本人」と思っても、周囲からは「ふつうの日本人」とは認められない。自分がだれであるかもわからない炳君には、心の置き場がない。「日本」と「中国」の間を漂うのだ。(朝日新聞 1995.1/14)

これは、『母の国』と題して朝日新聞に二週間にわたって連載されたルポからの引用である。その中の「心の置き場がなく、日本と中国の間を漂う」というところに「心の病」の一例がある。要するに、自分が何者なのか分からない、いわゆるアイデンティティの葛藤のことだ。これまで述べてきたような大きな日中間の社会的・文化的差異があれば、中国人である帰国者は、確かに日本になじめないだろう。その結果、この記事が言うように、「日本と中国の間を漂う」ことになる。これだけ日本と中国の差異を強調しておけば、読者も恐らく帰国者の「漂流」を納得するのではないだろうか。

記者は一体何を意図してこのルポを書いたのか。これが元々『50年の物語』というシリーズの一つであることから見ても、「戦後50年の総決算」を日本人に、あるいは政府に迫るものであるのかもしれない。帰国者問題も含めた戦後処理のまずさ、例えば帰国者の受け入れ政策の不備さを糾弾し、日本政府に改善を求めるために、帰国者が日本でいかに悲惨な生活を送っているかを強調しようとするのだろう。この姿勢は、その前に挙げた二つのルポにも共通するものだ。私はマス・メディアの主張自体を否定するつもりはない。しかし、その主張の手段として帰国者や中国を徹底して否定的なイメージで語るというのには疑問を感じる。自分の国や政府をしっかりとさせるためには、中国などどんなイメージで見られてもいいというのだろうか。それを自明のこととされているところにこそ、政治性が垣間見られる。このような言説が積み重ねられていく時、読者はその内容のみならず、一方的に語れる日本人と一方的に語られる中国という力関係をも内面化してしまうだろう。

では、この両者の力関係を、帰国者自身は一体どう受け止めているのだろうか。これは、帰国者が現実に新聞記事などを読んでどういう感想を持ったか、ということだけではない。サイドが、「社会と歴史とテクスチュアリティの三者間の相互関係」を強調するように(サイド 1993[1978]上:65)、帰国者が日常的に接触する自立指導員や身元保証人、あるいは自立指導センターや促進センターの職員やボランティアといった日本人、そして地域社会の日本人らも、これまで挙げてきたイメージを共有している可能性がある。従って、これらの日本人と接することは、記事に現れた力関係やイメージに否応なく関わることを意味する。次の章では、このような力関係の中で帰国者が日本人とどのように「交渉」しているのかについて、フィールドワークによって得られた事例を基に考察する。

4. 帰国者による「オリエンタリズム」批判

マス・メディアが帰国者や中国をあくまで日本との対比の中で表象しているように、帰国者も日本や日本人を中国や自分たちとの関係の中で語ることが多い。当然、中国についての語りは日本についての語りになり、帰国者についての語りは日本人についての語りになる。その語りの中で、帰国者は

一体どちら側の人間なのか、つまり彼らのアイデンティティも明らかになってくる。

例えば、帰国者二世の配偶者として来日したHさん（女性・30代）と、日本と中国の違いについての議論から、来日後の子供の教育方針についての話になった時、次のように語ってくれた⁽⁴⁾。

子供を最も良く連れていく場所は図書館と山登り。子供を自然の環境に触れさせるのは大変良い。山の上のような広い場所に連れて行って、子供に自分でいろんなことをさせる。広い場所に行けば、視野が広がる。広くて何もないところで、自分で考えて何かを始めさせる。狭いところには初めから何かがあるから、自由な発想で何かを始める余地はない。広いところは真っ白な紙と同じ。そこにいろんなことを書くことができる。

これは一見すると、「自然に密接でそれと調和して生きる」という、西欧の視点から見た周縁社会（例えばアボリジン）のイメージ通りに（Thomas 1994:28）、自分達を描いているようだ。ということは、マス・メディアの中国人に対する表象は現実なのかと思わせるが、実はそうではない。「広い場所」は確かに「何もない」が、「視野が広くなり」、「自由がある」と彼女は言う。そして「狭い場所」は「初めから何かがある」ため「自由がない」と言う。日中の差異を話し合っていたという文脈から見て、「広い場所」は中国を、「狭い場所」は日本を指していると解釈することもできる。彼女は、「日本＝都会、中国＝自然」という日本人の持つイメージをそのまま受入れる一方で、そこから「日本＝不自由、中国＝自由」という日本人が持つものと全く逆のイメージを引き出しているわけだ。しかも、その連想は確かに論理的であり、否定できない。日本人の言う通りにしながら、日本人の全く望まない結果を作り出す。これこそトーマスの言う「誤流用（mis-appropriation）」である。

トーマスが、「誤流用」を「植民地政治学の空間」あるいは「実践的な抵抗の空間」と呼ぶように（Thomas 1994:63）、それは抵抗と密接に結び付いている。従って、彼女の語りには、抵抗という政治的意味が含まれていると考えることもできよう。「オリエンタリズム」を研究した者だけが、言説の政治性に気付くわけではないのである。日本人が押し付けたイメージを（恐らくわざと）「誤流用」して、だいなしにしてしまっても、一応言葉通りにしているのだから日本人は怒ることはできない。日本人にとって、これはまさに皮肉であろう。こうしてHさんは、さり気なく日本人のイメージに抵抗してみせたのである。

もちろん、これは私という中国人になされた語りであり、直接日本人に対するものではないので、それで抵抗と言えるのかという疑問も成立する。しかし、私にこういうことを言えるということは、彼女は、いつでも日本人に対しても言える準備はしているということになる。それが現実のものにならなくてももちろんかまわない。ここで私の言いたいことは、帰国者にそのように巧妙に抵抗できる能力と意識、つまり主体性があるということなのだ。このような事例は実は少なくない。

次の会話がそうだ。これは残留婦人のSさん（女性、70代、帰国後18年）と日中の差異について話し合ったときのものである。

I：あなたは今の自分の生活をどう評価しますか。

S：自分の生き方で精一杯生活を営んでいます。他の日本人と同じようにするならば無理がありま

す。

I：なぜですか。

S：だって他の日本人は祖先からずっと日本に住んでいるから、例えば土地や家などを持っています。

Sさんは、確かに日中の差異を認めている。「同じようにすることは無理だ」と言うのだから。ただ、その違いを「土地や家」によるものとしているのである。個人個人には、そして社会・文化にも「本質的」な差などない。あるのは条件の差だけというわけだ。逆に言えば、「土地や家」を持っていない多くの日本人は、帰国者と何も変わらないということになってしまう。

この点は次のKさん（女性、70代、帰国後5年）の語りに、よりはっきりと現れる。

I：日本人は帰国者について語る場合はよく文化の相違を持ち出します。日本人にとっての相違は何でしょうか。

K：帰国者の素質（suzhi）が低いという意味でしょう。私の子供はちょうど文化大革命頃、中学生だったから、高校に行けなかった。しかし条件があまりよくない仕事に就いている日本人もたくさんいますよ。

Kさんとその前のSさんの語りは同じ「構造」を持っている。Kさんもまず日本人のイメージを受け入れ、「素質が低い（つまり学歴が低いという意味）」ということ認める。ところが、同時に、（帰国者同様）「素質が低い」ために「条件があまりよくない仕事に就いている日本人もたくさんいる」ことを強調するのである。結局、大した差はないということを行っているようなものだ。

帰国者の一つの特徴として私が気付いたのは、彼等は概して高い経済的レベルの日本人と自分達を比較することである。そして、自分達が貧しいことを言い立てる。これは一見、日本人と自分たちの差異化である。しかし、そのような高い経済レベルの日本人が多くないこともまた、誰でも分かる事実である。従って結局は、大半の日本人と自分達にそれほど差異はないということになってしまう。以上のように、SさんKさんに限らず、帰国者の日中の差異についての語りには、日本に都合のいいイメージを受け入れながら、結局は自分に都合のいいイメージに変換してしまう「誤流用」が見られるのである。つまり、帰国者は日本との差異を「主体的に」認めているだけで、いつでも「主体的に」否定する準備はしていることになる。

そして実際に次に見られるように、「差異」をあっさり否定する事もある。例えば、Kさん（女性、50代、飲食店経営、帰国後8年）の娘（40代、工場勤務）は、「仕事はあなたが想像するほど厳しくない。他の日本人と同じ様に、一緒に手抜きしながらやっているよ」と語ってくれた。また、日本語が不十分なOさん（女性、20代、工場勤務、来日後3年）に仕事は大変でしょうと尋ねると、「たいしたことない。他の人がどうするか見て真似ればいい」と答えてくれた。二人とも日本人との差をまるで認めていないのである。「日本人と同様に手抜きしている」という語りは、勤勉な労働の結果「高度成長を経た資本主義国」という先に紹介した井出のルポの一節に対する皮肉でもある。要するに、帰国者は、日本人が強調するような差異は、「真似れば」越えられるというのだ。それが現

実にそんなに簡単かどうかは別にして、そうできるのではないかと、少なくとも私に思わせたという事実をここで語ることは重要であろう。これまでの新聞記事やルポは、その可能性すら完全に隠蔽していたのだから。

こうして、マス・メディアによれば、帰国者に一般的な「心の病」であるアイデンティティ葛藤の原因として自明のものとされてきた文化の「落差」は、少なくとも帰国者自身から言えば、彼等によって「主体的に」否定される可能性があることがわかった。とすれば、論理的に言って、アイデンティティ葛藤も帰国者によって否定されることになるのではないだろうか。アイデンティティに直接関わる国籍についての語りを幾つか取り上げて、このことについて考えてみる。

5. 帰国者の主体的なアイデンティティ形成

先に挙げたルポ『母の国』の中で描かれた、帰国者の国籍取得の場面を見てみよう。

郭さんの国籍取得を認める家庭裁判所の審判書が送られてきた時、郭さんは「これで本当の日本人になれる」と万歳した。郭さんは自分が何者であるかを知らない。だから国籍にこだわるのだ。
(朝日 1995:1/4)

ここに見られるように、一般に帰国者は国籍取得にこだわるというイメージがあるが、実際はそうでもない。国籍について言えば、前にも出た食堂を経営するKさん一家は、この郭さんと全く異なった考えを持っている。Kさんの夫と長女は日本国籍に帰化していない。Kさんにその理由について聞いてみると、「いつか中国に戻って住みたくなった場合は、家族の中に中国国籍を持っている人がいれば便利。しかし、私は夫に帰化を勧めている。例えばアメリカに行く場合は便利」と答えてくれた。Kさんの長女(30代)は、「いつ自分の夫と息子と一緒に帰化するかもしれないし、しないかもしれない。あるいは中国に帰って住むかも分からない」と話していた。一方既に帰化した次女は次のように語る。少し長くなるが詳しく引用してみよう。

私は子どものために帰化した。日本は義務教育なので、日本国籍があれば子どもも無料で教育を受けられる。やはり両親のうちどちらか一方が日本国籍を持っているほうが便利。いずれにせよ、いつまでも日本にいるかどうか分からない。日本にいるなら日本国籍のほうが便利だし、中国に帰るなら逆。両方の国籍を持っているほうがいろいろと便利。だから私はここで日本の国籍を取った。夫はずっと中国籍を持っていればいい。私達はどこか住みたいところがあれば、そこで住む。

「自分が何者であるか」ということ、つまりいわゆるアイデンティティに関して、非常に柔軟であるというか、流動的なのである。日本が良ければ日本人になればいいし、だめなら中国に帰ればいい、あるいは第3国に行ってもいいとすら考えている。「どこか住みたいところがあれば、そこに住む」という語りがそのことを物語っている。どこに住もうが、その社会・文化と自分達の間に越えられない差異などないと思えるほどの余裕がそうさせているのだろうか。越境に自信があれば、それは次の移動への志向性を生み出すのである。私達が出国の方法について話していた時、彼等は私のある知

り合いの出国方法を聞き、「ええっ、まだそんな方法があったの」と感嘆の声を上げた。その時の彼等の口調、表情には、いつか機会があったらその方法を試してみようといわんばかりの意欲と好奇心が感じられた。彼等は日本人が考えるほど、アイデンティティにこだわってはいない。ましてや国籍など、道具ぐらいにしか思っていない。

もちろんこれはKさん一家に限られない。前述のHさんは、中国にいたとき、アメリカ人と文通をした経験があったという。これも前述のOさんは、私に向かって「私の友達の留学生も日本からアメリカに行った。本当にあなた方留学生には参るわ」と、尊敬と羨ましが混じったような表情で語った。また先程のSさんは孫の教育について次のように語る。「中国語だけでは物足りないです。英語やさらに東南アジア諸国の言葉をも勉強する必要があると私は思います。そして孫たちにもそう伝えていきます」。彼女達はいずれも日本という国に必ずしもこだわっていない。意外なことだが、帰国者の語りには西欧など外国の話題がよく出て来る。現実に行うかどうかは別として、さらに続けて移動することの可能性だけは留保しているのである。

以上の考察からわかるように、彼等が悩んでいる問題は、日本人との関係の中で、自分は中国人なのか日本人なのかという、民族や国家に関わるアイデンティティ葛藤のようなものではない。では、民族的アイデンティティにこだわらないとすれば、彼等は何を自分のアイデンティティにしているのだろう。J・クリフォードは、「自己やその集団の回りに、ある種の収集によって物質的世界の集合を造り上げ、自己の領域を他者のそれと区別することは多分普遍的である」と言う（Clifford 1988:218）。つまり「収集」のアイデンティティは人間に普遍的だというわけだが、一般にはマジョリティでは「富」がアイデンティティであり、マイノリティ（例えばエスニックグループ）は、「民族性」がアイデンティティであるかのように語られることが多い。これもまた「オリエンタリズム」的な差異化なのではないだろうか。まるで、マイノリティは民族以外に拠り所がないかのような、つまり個人的な発展のための努力を怠っているかのようなイメージを与えることになるからだ。

実際には、日本人が、「富（物、知識、記憶、経験）」を他の日本人との識別の基準にしているように、帰国者もやはり、自分が何をどれだけ「収集」しているかをアイデンティティにしている。この点でも帰国者と日本人は何も変わらない。「富」が多ければ多いほど、他の帰国者との差異を作り出し、それがそのまま彼等のアイデンティティになる。

I：あなたの日本語はぜんぜんまりの感じがなくてきれいですね。

S：私はずっと都市に住んでいました。そして私が住んでいた都市には残留婦人が他にもいたため、日本語での交流ができたのです。農村で暮らしてきた孤児とその点において違います。

I：あなたは他の帰国者のことをどう思っていますか。

S：中国語しかできない多くの帰国者は日本語を使うチャンスが少なかったため、難しいことが多いと思います。しかし、私の子供は「お母さんが日本人」ということで、話すチャンスが少なくても、聞くチャンスが多かったため、みんな早く日本語を話せるようになった。

このSさんの語りから、日本語能力や都市出身であることに基づき、自分を日本語ができない帰国者や農村出身の帰国者と区別していることが見受けられる。このように、自分達家族が、他の帰国者

と比べていかに成功しているかを私に強調する帰国者は多い。例えばKさんは、ある帰国者が帰国後8年かかってやっと食堂を開いたことを例に出して、自分がいかに早く開くことができたかを強調するのである。大抵の帰国者は自分が都市に住んでいたことを主張するし、北京に何年住んだことがある、という自慢話も少なくなかった。Eさん（女性、60代、帰国後15年）は「私は万全の計画を整えて日本に来た」と言って、3人の子どもが日本で大学を卒業したこと、いい仕事に就いたことを語ってくれる。日本人ボランティアとの「ふれあい交流会」のようなイベントでは、帰国者たちは日本人よりずっといい服を着てきて、帰国者同士で見せ合う光景が見られる。イベントそのものにはあまり熱心ではないが、服や子どもの自慢には大変熱心である。このような例は枚挙に暇がない。

彼等にとってのアイデンティティとはこのようなものであるからこそ、第3国に行くことも考えるし、中国に戻ることもありうる。自分の所有するものを増やすために、彼等の旅は続く。確かに記事が言うように、彼等は「日本と中国の間を漂う」のだが、それは受動的なものではない。自分が所有するものを増やしていくために「主体的」に旅を続けるのだと言えよう。

註

(1) ここでは、この記事を書いた記者が、このような差異化を明確に意図していたかどうかは問題ではない。意図するかどうかにかかわらず、中国に関する記事やニュースが、必ず、中国が絶対的な他者であることを読者に印象づけるような語り口に向かってしまう、そしてそのことに語り手が全く無頓着であるということ自体が問題なのだ。

本稿は、そのような状況を、サイードが「オリエンタリズム」と呼んだ情況と重ね合わせ、彼の問題意識を採用しながら、中国帰国者のイメージについて批判的解釈を試みるものである。

(2) 私は、現在まで二年半にわたってF県の帰国者を中心にフィールドワークを行ってきた。特に、F県庁の援護課の通訳、F県の自立研修センターの通訳職員として帰国者の支援活動に携わり、参与観察の中でインタビューを実施している。

(3) 朝日新聞については、帰国者関連の特集記事は署名入りで書かれており、大久保真紀氏がずっと担当しているようだ。本稿では触れなかったが、西日本新聞も、署名入りではないが、共同通信社に勤める私の知り合いがずっと帰国者問題を担当し、記事を西日本新聞に送っている。とすれば、他の読売、毎日も同じように特定の記者がこのテーマを担当している可能性は高く、一つの新聞社の記事には一定の傾向が出ることは当然であろう。

(4) 一口に「帰国者」と言っても、その内実はもちろん多様である。「帰国者」のうち、本当の意味で日本に帰国してくる残留邦人はそのほんの一部に過ぎない。「残留日本人の大半は、中国社会での40年近い歳月の中で、あらたに配偶者を持ち、子供を得、新しい家族的紐帯を形成しており、彼等のほとんどは、そのような家族的関係を何らかの形で維持しながら日本へと渡ってきている」のである（鈴木 1988:108）。しかし、マス・メディアは彼等全てを引っくるめて「帰国者」とし、ステレオタイプで語っている。彼等全てに「中国人」という「構造」があるかのように。従って、私もこれに対応して、残留邦人、その家族・親族にかかわらず、彼等のうちの誰かの語りは全て「帰国者」の語りと見なすことにする。

引用文献

Clifford, James.

1988 *The Predicament of Culture*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Coronil, Fernando.

1996 Beyond Occidentalism: Toward Nonimperial Geohistorical Categories.

Cultural Anthropology 11(1): 51-87. American Anthropologist Association.

井出孫六

1986 『終わりになき旅』, 東京: 岩波書店。

サイード、E. (Said, Edward.)

1993 (1978) 『オリエンタリズム (上・下)』, (今沢紀子訳), 東京: 平凡社。

鈴木智之

1988 「中国帰国者の『子どもたち』」, 『解放社会学研究』No.2, 108-125頁。

Thomas, Nicholas.

1994 *Colonialism's Culture*. London: Polity press.

読売新聞大阪社会部 (編)

1982 『中国孤児』, 大阪: 読売新聞。

【付記】

本稿は、1996年1月に九州大学大学院比較社会文化研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。特に、本稿をまとめるにあたっては、九州人類学研究会（1996年3月）においての口頭発表の際に参加者の方々からいただいた有益なコメントを参考にさせていただいた。この場を借りて感謝の意を申し上げたい。

さらに調査の際には、F県に住む多くの中国帰国者の方々が、お忙しい中時間を作って会って下さった。また、F県庁の援護課の皆様にはそのお世話をさせていただいた。一々お名前を列挙することは差し控えるが、それら全ての方々に心から感謝の意を表したい。